

ジョナサン・エドワーズと絶對者を戴く文化

(一) 對極に在る文化を知る事

「この世が別様の世になる事は決してない、さう確信するに足る十分な理由を自分は持ち合はせてゐる」、一七二四年、當時二十歳のジョナサン・エドワーズは日記にさう書きつけた。即ち、この世は未來永劫、不完全な人間の作る不完全な世界でしかないと信じてゐた譯だが、十八世紀前半の激烈な信仰復興運動を指導した「アメリカ最大のカルヴィニスト」の若き日に、これは如何にも相應しい言葉だと思ふ。有限で不完全な人間の在り様を直視する事こそカルヴィニズムの顯著な特色だからだ。やはり若き日の備忘に、エドワーズはかう書きもした。「自己自身以上に何物かを愛する事が、果して人間に可能であらうか」。これまた、如何にもカルヴィニストらしい言葉であつて、エドワーズの見た人間は徹頭徹尾自己愛の虜でしかなく、エドワーズはさういふ悲觀主義的人間觀を五十四年の生涯を通じて持ち續けたのだが、十八世紀といふ時代を考へる時、これは頗る特異な態度

と云はねばならない。

周知の如く、西洋の十八世紀は人間に對する信仰が威力を揮つた時代であつた。フランスのヴォルテールたち啓蒙主義者が人間の本性を善と看做し、その理性的能力に大きな信頼を寄せ、アメリカに於ても、ベンジャミン・フランクリンやトマス・ジェファソン達が此の世を改革して別様の世たらしむべく奮闘した。けれども、エドワーズの信念はさういふ時代の風潮ゆゑに些かも動揺する事なく、それどころか、この「最後の中世人」は殆ど孤立無援の状態に陥りながら唯一絶対の神に對する燃えるやうな信仰を胸に、人間に對する信仰ゆゑの樂觀主義を弾劾し續けたのである。

しかも、さういふ頑なな態度ゆゑに、かつては「時代錯誤の權化」と誹られた事もあつたエドワーズが、二十世紀、兩大戦に挟まれた時期以降、急速に注目を集めるやうになり、今日のアメリカに於ては、「全てのヤンキーの父」と稱へられるフランクリンを凌いで研究者の關心の的となつてゐる。二つの世界大戦を経験した現代人にとつて、啓蒙主義の時代以來の通念はもはや人間の現實の説明として飽き足りない、といふ事かもしれない。それからあらぬか、一九五八年、アメリカの著名な神學者H・リチャード・ニーバーは、エドワーズの没後二百年を記念する講演の席上、第二次世界大戦の慘禍やアウシュヴィッツの悲

劇に言及しつつ、かう語つた。

我々はこれまでの考へ方を變へ、エドワーズが語つた多くの事柄が眞實であつたと思ふやうになりました。否、寧ろ、現代に起つた出來事によつて我々は考へ方を變へさせられてしまつたと云ふべきでせう。我々はエドワーズの惡に對する見方と同じやうな見方をするやうになりました。我々の方で惡を知りたいと望んだ譯ではありません。惡の方で無理矢理自らを押しつけて來たのです。

「この世が別様の世になる事は決してない」といふのも、エドワーズが語つた何時の世にも通用する「眞實」の一つなのであり、それゆゑ、二千年以上も昔、プラトンもまた、この世が樂園になる事は決してなく、人間になし得るのは精々この世が地獄になるのを防ぐ事くらゐだと云つたのである。しかし、「現代史上に起つた出來事」は、この世が地獄になるのを防ぐ事すら人間には出來なかつた事を示してゐる。十九世紀アメリカ文學を代表するハーマン・メルヴィルもまた、人間の宿命的眞實を決して回避しない作家だつたら、「死なねば直らぬ痛みを知れ」とて、情緒的な時流に冷水を浴びせ、多くの讀者を失ひ、やはり二十世紀になつて漸く眞實を評價されるやうになり、今ではアメリカ最大の作家と目されてゐる。その點、エドワーズと頗る相似た運命を辿つた譯だが、この二人の天

才がいづれもカルヴィニズムの人間觀の強固な傳統を背負つてゐるといふ事實は、如何に強調しても強調し過ぎる事はない。

殊に、正統的カルヴィニストとして唯一絶対の神に對する搖るがぬ信仰を持ち、絶対者の前では全ての人間が忌はしい罪人でしかないと信じたエドワーズの場合、惡に對しては毫末の假借もなかつた。例へば、牧師だつたエドワーズは己れの教区内に住む四歳の幼児の宗教的回心體驗を克明に記録してゐるが、それを讀むと、一人前の大人の信仰をめぐる葛藤の記録でもあるかのやうな異様な印象を受けるのである。それは恐らく、エドワーズが大人の邪惡な性質は子供にも染み込んでゐると信じ、四歳の幼児をも一人前の罪人として扱つた結果であらうとある學者は書いてゐる。實際、エドワーズは子供を「蝮の輩」と罵倒した事さへあつたのであり、子供を美化して無垢なる存在と考へるジャン・ジャック・ルソー以來の近代ロマン主義は、エドワーズの人間觀とは全く無縁であつた。

十九世紀に至つて、「ピューリタン中のピューリタン作家」と稱せられるナサニエル・ホーソンは『優しい少年』といふ作品を書き、純眞で無力な仲間を苛めて楽しむ子供の殘酷な慾望を赤裸々に描き出し、近代ロマン主義の甘い人間觀を痛烈に批判した。そしてさういふホーソンの作品に内在する「暗の力」に感動して、メルヴィルは『モービー・ディ

ック』をホーソンに捧げ、カルヴィニズムの峻烈な人間觀の傳統を繼承し、やがてそれを二十世紀のウィリアム・フォークナーが受け繼ぐ次第となる譯だが、それはともかく、エドワーズやホーソンの考へ方は今なほ少しも古びてはゐない。子供であれ大人であれ、有限にして不完全といふ人間の宿命を免れない以上、子供の中にも大人と同じ邪惡な慾望が潜んでゐる。現に、内なる獸性を制し得ない子供による、いはゆる「苛め」は後を絶たない。詰り、子供であれ大人であれ、人間はいつでも「蝮の輩」なのである。

エドワーズの人間觀は「徹底的にリアリステック」だとニーバーが評するゆゑんだが、さういふ徹底性は詰るところ唯一絶對の神に對する信仰に由來する。詰り、人間を超える存在以外に信仰の對象を認めないカルヴィニズムは、人間に對する一切の信仰を否定して、どこまでも假借ない人間觀を持つ。そして勿論、さういふ徹底的なリアリズムは、八百萬の神々を戴く日本文化の傳統の中には存在しやうがない。絶對者を戴かぬ我々は、エドワーズのやうに人間をどこまでも相對化する視点を、性惡説に徹する人間觀を持つ事が出来ない。戰爭放棄を謳ふ世界に類例無き憲法を後生大事に守り續け、かつての敵國に半世紀間も自國の防衛を全面的に依存して平氣でゐられる所以である。更にまた、絶對者を戴かぬ我々は、エドワーズのやうに時流に動かされぬ確乎たる形而上學的信念を持つ事も出来

ない。安保にせよ外交にせよ、吾國の政策が常に外壓に左右され、言論の世界に於ても、かつて殿岡昭郎が『言論人の生態』に於て喝破したやうに、「情況の變化」が勝敗の決め手となる所以である。それゆゑ、エドワーズについて知る事は、我々の文化の對極に存在する文化を知る事に他ならない。

(二) 中世的精神の鞏固な持續

カルヴィニズムの鼻祖にして「神に酔へる人」と呼ばれたジャン・カルヴァンの熱烈な信仰を象徴する興味深い逸話がある。一五六五年、カルヴァンがジュネーヴで没した時、全市民はあげて悲しんだものの、やがて遺を偲んで墓を訪れる人も殆どなくなつて埋葬された場所も忘れられた。生前の崇敬が贖物だつたからではない。カルヴァンが墓石を据ゑるなど固く云ひ遣し、それに市民が忠實に従つた結果であつた。

カルヴァンがそのやうな遺言を遺したのは、ジュネーヴ市民の己れに對する追憶の念が宗教的感情にまで高揚し、唯一絶対の神にのみ向けられるべき尊崇を冒す事を懸念したか

らであつた。「謙遜は信仰者の持つべき最高のもであり、あらゆるの母もしくはその根である」とカルヴァンは云つたが、唯一絶対の神に對する「謙遜」を、即ち神に對する徹底的な自己否定の態度を貫く事に、この「神に酔へる人」は一生を捧げたのである。

エドワーズにしても同様であつた。ニューイングランドの名門の聖職者の家に生れ、幼児から「完全なキリスト教徒」たるべく厳格な教育を受け、自らもそれを生涯の理想とし、十九歳の時、七十箇條に及ぶ「決意」の項目を作成して、毎週一度は必ず讀み返し内省の機會にしてゐたといふが、その第六條には、「生きてある限り、全力で生きるべし」、第九條には、「苦痛を覺えた時には殉教者の苦痛、及び地獄の苦痛を思ふべし」、第四十三條には、「死する時まで、己れの身體は己れの所有物にあらずして、どこまでも神の所有物であるといふ覺悟で行動すべし」とある。正に、己が全てを「神の所有物」となし、「殉教者」の覺悟で「全力で生きる」事こそが、エドワーズの生涯の理想なのであつた。

その點、エドワーズが四十六歳の時に編集して刊行した『デイヴィッド・ブレインード・師の生涯と日記』と題する書物は頗る興味深い。そこから浮び上つて來るデイヴィッド・ブレインードといふ實在の人物の生涯を通じて、エドワーズの理想人間像を極めて具體的に知る事が出来るからだ。しかもこの書はエドワーズの手掛けた著作の中でも最も多くの

讀者を獲得し、時代によつては、ブレインードの名聲がエドワーズのそれを凌駕した事さへあつた。それほどブレインードは後世の信仰復興運動に大きな影響を與へたのである。

デイヴィッド・ブレインードはエドワーズより十四歳年少のカルヴィニストの傳道師で、二十二歳の時から邊境地帯のインディアンに對する布教活動に勵んだが、苛酷な自然環境の下での活動は困難を極め、しかも元來病弱だつたため甚しく健康を損ひ、結核が悪化し、浮腫と下痢に苦しみ、屢々吐血したが、起き上れなくなるまで布教を續け、一七四七年、激痛と戦ひつつ三十年の短い生涯を終つた。

ブレインードは死の直前の時期をエドワーズの牧師館で過し、婚約者だつたエドワーズの次女ジェルーシャの獻身的な看護を受けながら最期を迎へる。そしてその五箇月後、結核に感染したジェルーシャもまた十八歳の若さでこの世を去る。エドワーズはブレインードの為人にいたく敬服し、遺された膨大な日記を整理し編輯し、懇切な解説を附して出版した。即ち、『デイヴィッド・ブレインード師の生活と日記』であるが、そこに示されてゐるブレインードの敬神の態度は、正に殉教者さながらの凄じさなのである。

例へば、如何に激烈な肉體的苦痛もブレインードにとつては神の意圖の發現であり、自らに對する試練であつて、何ら不平の對象とはならない。彼は日記にかう記してゐる。

自分にこれらの苦痛をお與へになる事で、神が何を意圖してをられるのか、それは私には解らない。けれども、その苦痛の全てが、そしてまた、それより遙かに多くが、自分には全く相應しいのだといふ事を私は知つてゐる。

だが、さうして肉體的苦痛には耐へられても、どうしても耐へられない精神的苦痛がブレイナードにはあつて、その苦痛ゆゑに彼は屢々深刻なメランコリーの症状を呈する。それが餘りに頻繁に起るので、エドワーズすらブレイナードの性格上の缺陷と評さざるを得なかつた程だが、實はメランコリーをもたらず原因はブレイナードの熾烈な理想主義自體の裡にあつた。

詰り、ブレイナードは「神への奉仕のために自ら燃え盛る炎と化して」燃焼し盡くしたと熱烈に願ひ、完璧な「自我の死滅」を切望してやまなかつたのだが、それがどうしても實現出来ない。己が心中に、常に自らの幸福を願ふ氣持や、自らを賞賛する氣持を、詰りは「自己愛」をどうしても見出して仕舞ふからだ。ブレイナードは「神の前にいたく恥ぢ、己れを激しく憎惡」し、メランコリーに陥り、その度に懊惱しかつ祈つた。時は矢のやうに過ぎて行くのに、自分はかうして時間を空費してゐる。何と不甲斐ない事か。おお、神よ、どうか私の時間をより良きものたらしめ給へ。

さういふブレイナードをエドワーズは「眞實のキリスト教徒の驚嘆すべき敬神の模範」と絶賛し、次女のジェルーシャが亡くなつた時、「娘はブレイナードとよく似た精神の持主だつた」と日記に記した。無論、さう書いたエドワーズ自身が、ブレイナードと「よく似た精神の持主」に他ならなかつた。次女の葬式の五日後、エドワーズは説教壇から會衆に向つて、次女の死に深い哀悼の意を表してくれた人々の思ひが、廣範な信仰の覺醒の切掛となる事を切に望むと語り、かう締め括つた。

さういふ喜ばしい結果がもたらされる事になつたならば、私の喪失感が如何に深いものであつても、悲しんでばかりゐる必要はないのです。それどころか、我々は神のお慈悲を大いに稱讚しなくてはなりません。

これは單に説教壇上の言葉ではなかつた。エドワーズの生涯に互る眞實が、この言葉には込められてゐた。即ち、エドワーズは「家族の中の花」と呼んで可愛がつてゐた次女の死すら、「神のお慈悲を大いに稱讚」する機會となし得ると本氣で信じ、神に對する尊敬の念をあくまで重んじようとしたのであり、ブレイナードの死の八年後には、僅か十歳の次男を邊境地帯のインディアン部族の許に送り、傳道師になるための修業をさせてゐる。そこは、最寄りのイギリス人居住地からでも二百キロ近くも離れた僻地であつたといふ。

更にまた、エドワーズ自身が、ブレインードに肖らうとでもするかのやうに、五十歳近くなつてからインデイアンの言葉を學び始め、最晩年の數年間、邊境地帯のインデイアンに對する布教活動に全力を注いだのである。

一七二三年の日記に、十九歳のエドワーズは書いてゐる。「自分はキリスト教徒としての競争に一層精勵して、今より遙かによい人間になつてこの世を去らねばならない」。エドワーズはブレインードを「キリスト教徒としての競争」の好敵手とみなしてゐたに相違ない。二十四歳の折の覺書にも、エドワーズは「神の道具」としての自己否定の理想を語る激しい文章を書き、武器であれ道具であれ肉體であれ、「激烈な緊張、壓力、振動、衝突、衝擊」に耐へてこそ有用たり得るのであり、「偽善者どもは、ひびの入つた齒、關節の外れた脚、裂けた杖のやうなもので、緊張や壓力を掛けられると忽ち物の役に立たなくなる」と斷じてゐる。

アメリカの學者の中には、エドワーズもブレインードも餘りにピューリタニックで、古臭い「中世人のファナティシズム」を想起させると云ふ者もある。だが、中世的精神は、歐米に於て、今なほ簡單に舊弊として片づけられない力を持つてゐるのではあるまいか。いつぞや、産經新聞にロサンゼルス支局長の高山正之が書いてゐた事だが、テネシー州議

會上院は今なほ「進化論を教へる教師を解雇」する法案を可決するやうな事をやつてをり、また、共和黨の有力大統領候補だつたパット・ブキャナンはABC放送とのインタヴューの席上、學校で「子供に進化論を教へないやう」、両親は「主張する権利がある」と語つたといふ。高山は「おどろな中世的米國」と評してからかつてゐるのだが、例へばフォークナーの次の言葉を我々はからかふ事など出來はしない。ある時、キリスト教についての考へ方を問はれて、フォークナーはかう答へた。

それは一つの行動規範であり、それに従ふ事によつて我々は、自然の慾求のみに従つた場合になりたいと思ふやうな人間よりも、よりよき人間になる事が出來るのです。

このフォークナーの言葉と、エドワーズの「キリスト教徒としての競争」の意との間に、質的な差違はない。我々は「おどろな中世」を嗤はず、「よりよき人間になる事」を望む精神の傳統の、アメリカに於ける鞏固な持續に注目せねばならない。

(三) カルヴェニズムの假借なきリアリズム

エドワーズの日記や覺書には、嚴しい理想を語るエドワーズだけではなく、理想に従ふ事の困難に直面して、激しく懊惱するエドワーズがある。回心體驗を綴つた一種の自叙傳たる『信仰告白録』に於てもさうである。そこでエドワーズはどうしても完璧な「神の道具」たり得ぬ己れを、「自我の死滅」といふ眞の謙遜の境地に到り得ぬ罪深い己れを斷罪し、自分は「全人類の中で最悪の存在」であり、「地獄の最も深い深淵」に墮ちる事こそが相應しく、「無限の上に無限を積み重ねる」とでも云はなければ、己れの罪深さを十分に表現出來ないとまで書いてゐる。

さういふ徹底した自己斷罪の態度ゆゑに、エドワーズはつひには「己が胸中に湧き上る喜びの感情の事を思つただけで、もしくは、性格の優しさとか仕事ぶりの立派さとか、詰りは己れの心情や生活に於ける好ましい側面について僅かでも考へただけで、胃がむかつき、強い吐き氣を催す」やうになる。しかも、さうして自己をどこまで弾劾しても、エドワーズは結局「高慢で獨善的な精神」が心中に蠢くのを感知し、「自分の周圍の至る處で、いつでもどこでも、蛇の奴めが背中をのばして鎌首をもたげてゐる」と慨嘆せざるを得な

い。

エドワーズは屢々、「神の恩寵なき人間の悲惨」について語つたパスカルに擬へられる。パスカルに類似してゐるだけではない。「自己愛」といふ蛇と格闘して七轉八倒したアウグステイヌスやルターやカルヴァンの傳統が、エドワーズを通じて十八世紀のニューイングランドに甦つたのだ。そしてそれらの先達と同様、蛇の誘惑を斥けるには人間は餘りに無力で悲惨な存在でしかないと思つたエドワーズは、神の恩寵なき人間の無力と悲惨を世人に思ひ知らせる事に、カルヴィニストの牧師として最大の努力を傾注した。その最も有名な例が、「罪人は怒れる神の御手に」と題する恐るべき説教に他ならない。

一七四一年、「大覺醒」と稱せられる熱烈な信仰復興運動がニューイングランドを席捲しつた頃、エドワーズはエンフィールドといふ小さな町の教會で「罪人は怒れる神の御手に」と題する説教を行つた。エンフィールドの聴衆は信仰復興運動に當初は冷淡だったが、エドワーズの説教を聴いて激しく動搖し、恐怖に泣き叫ぶ聲が教會に充滿し、エドワーズは靜肅にするやう屢々注意しなければならなかつたといふ。

説教に於てエドワーズはまづ、「人間の本性それ自體の裡に地獄の責め苦の根柢は据ゑられてゐる」と云ふ。エドワーズにとつては、人間の本性それ自體が墮落してゐるのであ

り、誰もが「地獄の責め苦」を科せられる可能性を孕んでゐる。けれども、愚かにも人間は己が危険を自覺せずして蛇の誘惑のままに生きてゐる。さういふ人間の墮落に對する神の怒りを、エドワーズは「雷鳴轟く大嵐」だの、「今にも決壊しさうな堰」だの、「引き絞られた矢」だのに喩へて聽衆を威嚇する。

神の怒りの弓は引き絞られ、矢は正に弦から放たれんとしてゐる。義なる神は矢を汝の心臓に向け、弓をきりきりと引き絞る。その矢が今にも汝の血に酔ひ癡れんとするのを辛うじて止めてゐるのは、如何なる約束にも義務にも縛られぬ神の、怒れる神の恣意ではない。

かういふ表現に眉を擡め、エドワーズのサディズムを疑ふ學者もゐるくらゐだが、それはともかく、ここでエドワーズが神の「恣意」を強調し、神は人間に對して「如何なる約束にも義務にも縛られ」ないと云つてゐるのは頗る注目値する。宇宙の絶對主權者とされるカルヴィニズムの神の特徴が如實に示されてゐるからだ。さういふエドワーズの神を、「神は自ら助くる者を助く」と云つたベンジャミン・フランクリンの神と比較してみれば、相違は歴然としてゐる。フランクリンの神は「自ら助くる」人間の努力に應へてくれる存在であり、云はば人間との契約の對象として人間の理解し易い神ではないが、エドワー

ズの神は人間の理解や願望を超越して神自らの「恣意」にのみ従ふ存在であり、正に人間とは隔絶した絶對者としての神に他ならない。もう一つ例を挙げよう。エドワーズはかう云ふ。

おお、罪人よ、汝が置かれてゐる恐るべき危険を思へ。汝は今、大いなる怒りの爐の上に、怒りの炎の燃え盛る廣大にして底なしの穴の上に、怒れる神の手によつてぶら下げられてゐる。しかも、汝に對する神の怒りは、地獄に墮ちた多くの者どもに對すると同じく、らゐ激しく凄じいものであり、さういふ神の怒りの炎が燃え盛る中、汝は今、今にも焼けて焦げて斷ち切れてしまふかも知れぬか細い一本の糸を頼りに、辛うじてぶら下つてゐるに過ぎない。しかるに、汝は神との仲立ちたるキリストの事を少しも思はず、己れを救ふ手掛りも何一つ持ち合はせず、怒りの炎を遠ざける事も出來ずにある。汝の持てる何によつても、汝の過去の如何なる行為によつても、汝の現在なし得る如何なる行為によつても、神の許しを得る事など決して出來はしないのである。

詰り、エドワーズにとつては、人間の意思と神の意思との間には決定的な斷絶があり、神の意思を動かして自らを救済する手立を人間は何一つ持ち合はせてゐない全く無力な存在でしかないといふ事になる。エドワーズはカルヴェイニズムの信念にあくまでも忠實なの

である。神と人間との斷絶を強調して、神の領域と人間の領域とを峻別する點にこそ、カルヴィニズムの最大の特徴はあるからだ。

「神が豫め選んだ人間のみが救はれる」とするカルヴィニズムの有名な豫定の教説にしても、人間と神との斷絶を強調する論理の必然的結果に他ならない。豫定説とは簡単に云へば、誰を救ふか救はないかを決めるのは絶對者たる神の御心次第なのだから、救はれたいからとて人間がどんなに足掻かうと、救はれない者は救はれないといふ、人間の立場からすれば頗る絶望的な考へ方であり、マックス・ヴェーバーがそれを評して「恐るべき教説」と云つた所以だが、問題は、さういふ「恐るべき教説」を生んだカルヴィニズムの宿命觀が、ニーバーの云つたやうに、人間の現實の説明として「徹底的にリアリストイック」だといふ事である。

事實、この世には、人間がどんなに足掻いてもどうにもならぬ事柄が幾らもある。例へば、「敵をも愛せ」と二千年前にイエスは云つたが、今日のイスラエルやボスニア・ヘルツェゴヴィナやチェチェンやルワンダに於ける慘状は、カインとアベルの昔から人間が道的にさつぱり進歩せず、何時になつても敵を愛せる存在にはなれない事を證してゐる。シエイクスピアの『ヴェニス商人』に於て主人公のシャイロックは、「憎い、だから殺し

たくなる、人間なら誰でもさうだらうが」(福田恆存譯)と嘯くが、さういふ宿命的人間性を如何に足掻いても人間は決して克服出来ない。エドワーズはある時、悪魔が大聲で云つた事でも、「眞實はやはり眞實だ」と云つた。詰り、人間に關する眞實が如何に忌はしいものであつても、彼はそれから決して目を背けようとはしなかつた。それこそ人間に對する一切の信仰を免れたカルヴェニストならではの假借なきリアリズムなのである。

(月曜評論 平成八年六月)